

〈論文〉

言語景観に関する計量的研究

江 源

キーワード：言語景観，計量的研究，三角グラフ，コレスポネンス分析

1. はじめに

言語景観は言語と社会との複雑な関わりを可視化したものとして捉えられる。グローバリゼーションが進むとともに、言語景観はこのような時代の変化を敏感に反映し、グローバリゼーションを測る指標になりつつある。すなわち、言語は社会活動の産物であり、言語使用状況は社会状況の縮図でもある。本稿は、景観に見られる言語使用の実態を計量的に考察することによって、その社会的形成過程を解明しようとするものである。

2. 先行研究

江(2009)は、理論的出発点によって、日本における先行研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービスの研究というように4種類に分類し、紹介した。同時に、海外でも様々な視点や方法による調査研究がなされてきた。ここでは、先行研究の問題点及び課題を検討していく。まず、先行研究は方法論がそれぞれ異なるため、各研究者による研究と客観的に比較することが困難である。先行研究のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究の果たした意義は大きい。しかし一方で、言語景観における通時的研究という視点を導入する必要性があることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点を導入すべきだと考える。次に、言語景観における言語あるいは言語使用そのもの、いわゆる言語内的な側面に焦点を当てたものが多いが、言語景観に含まれる社会的側面、いわゆる言語外的な側面にも関心を払うべきである。また、特殊な地域における特殊な個々の看板に着眼したものが多く、世界範囲で言語景観使用傾向の共通性、言語景観の成り立ち方、すなわち形成の法則性を探るものは見当たらない。

以上のことから、本稿では、筆者の調査によるデータのほかに、先行研究および歴史的写真集、

また他の研究者に提供されたデータも活用した。文字種の組み合わせ方、使用言語種（母国語、英語、その他）の比率を算出し、可能な範囲で筆者のデータと比較することによって、言語景観研究の方法論の確立を図りながら、言語景観研究を理論的に位置づけていくことにする。

3. 研究概要

3.1 研究目的

言語景観の形成過程を含めて、言語景観の全容を、たとえ概説的にでもとらえたとすると、それは、単に言語の問題だけにとどまらない。社会や文化の問題から、さらに政治・経済の問題なども関連してくる。言語内の側面だけでは、十分なものとはいえない。

本研究の一番の目的は、社会言語学的観点から景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その形成過程を解明することである。そして、もう1つの狙いは言語景観を観察することによって、言語景観の定義を新たに定め、実証的に国際化・英語化・多言語化等の社会的変化の進行状況を測定することである。

3.2 研究対象

本稿では、研究項目は言語景観を2つの社会的属性（地域、業種）、3つの言語的属性（言語種、文字種、表記法）という5つの項目に設定した。三角グラフ、コレスポンデンス分析によって得られたグラフをマクロ的視点で総合的に考察する。また、実地調査のほかに、補足調査として、歴史的写真集との対比を実施している。さらに、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、本調査結果の分析を補足し、比較するための資料とした。

なお、筆者のデータ以外に使用した資料及びデータは下記に示す。

- ①井上（私家版）
- ③本間（2010）
- ④写真集 1850-2010 跨越世紀の上海城市影像（英文版）
(1850-2010A Photo Contrast of Past Glories and New Accomplishments)

調査は、路上観察や予備調査を重ね、以下の4都市の16地域における言語景観について行った。2007年6月から12月にかけて東京都23区内にある銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町で、2009年2月には上海市にある南京路、豫園、新天地で、3月には大阪市にある道頓堀、心斎橋、日本橋電気街で、2010年6月には香港にある旺角、油麻地、尖沙咀、銅羅湾、蘭桂坊である。この16地域を対象とした理由は一般知名度が高く、質量ともに代表的な商業集積地域であり、社会経済活動が集中しているからである。

まず、最初の観察や予備調査では、「商業施設の言語景観には経済原理が反映されやすいため、言語的多様性は公的表示よりバラエティーに富んでいる」（井上 2007）ということから、東京都内23

区にある商業集積地域から選ぶことにした。具体的には、「東京の商業集積地域（商業統計調査報告～商業集積地域別集計編～）平成9年」により、区ごとに商店数が多い商業集積地域上位3位までをリストアップした。次に商店総数が多い区のランキングから1位の中央区にある銀座地域（当区1位）、11位の港区にある青山通り表参道周辺（当区3位）、3位の新宿区にある新宿駅東口（当区1位）、10位の千代田区にある秋葉原（当区1位）、15位の江東区にある門前仲町周辺（当区2位）という5つの地域のメインストリートを選んだ。ここで取り上げた5つの調査地域の一般的なイメージは、一言でいえば、銀座が高級感溢れる古くからの繁華街、表参道が外国高級ファッションブランド店の林立するおしゃれな町、新宿が活気溢れる新興繁華街、秋葉原が世界各地からの人々を引きつける電気街、門前仲町が下町情緒豊かな場所と言われている。本稿では、各地域の言語景観に見られる言語使用の状況はどの程度このイメージを反映しているのかにも注目したい。考察の結果は、この5つの地域における言語景観に見られる言語使用パターンを本国志向（銀座、新宿、門前仲町）、欧米志向（表参道）、アジア志向（秋葉原）に分けられたことである。そして日本の他の都市も、あるいは他の国の都市もこの考察の結果と同様にパターン化されるかどうかを検証したいという問題意識で、後に、大阪、上海、香港で東京の3パターンの5つの地域に類似した地域をそれぞれ選び、調査を行った。

調査対象は調査地域のメインストリートに面した両側の明瞭に見られるすべての店名表示、広告看板などの商業看板が主体となる非公的言語景観で、デジタルカメラで撮影した。夜間になると、景観上また変わってくるため、調査の時間帯は昼間に限定した。

本研究では、採集した写真データを地域、言語種、表記法、文字種の組み合わせ方、業種という5つの項目に分けて、統計ソフトSPSS（15版）によるコレスポネンス分析という多変量解析法に適用できるように、それぞれコードを与えて、数値化した。

4. 三角グラフ

図1は表1のデータを視覚化し、左から、母国語の使用率が高い順番となっている。各地域の言語景観における言語種の割合が分かるが、3種類の言語の相関関係を捉えるために、図1のような三角グラフを作成してみた。以下のことが読み取れる。

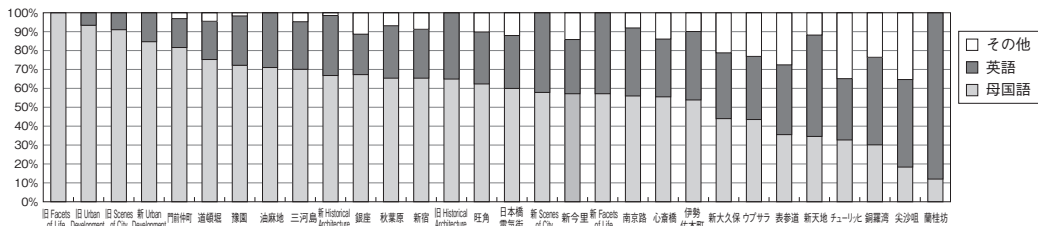


図1 言語景観における言語種使用割合

表1 言語景観における言語種使用割合の内訳

	母国語	英語	その他
旧 Facets of Life (上海)	1.00	0.00	0.00
旧 Urban Development (上海)	0.94	0.06	0.00
旧 Scenes of City (上海)	0.91	0.09	0.00
新 Urban Development (上海)	0.85	0.15	0.00
門前仲町 (東京)	0.82	0.15	0.03
道頓堀 (大阪)	0.76	0.19	0.05
豫園 (上海)	0.72	0.26	0.02
油麻地 (香港)	0.71	0.29	0.00
三河島 (コリアンタウン)	0.71	0.24	0.05
新 Historical Architecture (上海)	0.67	0.30	0.02
銀座 (東京)	0.67	0.20	0.13
秋葉原 (東京)	0.66	0.28	0.07
新宿 (東京)	0.66	0.26	0.09
旧 Historical Architecture (上海)	0.65	0.35	0.00
旺角 (香港)	0.62	0.28	0.10
日本橋電気街 (大阪)	0.60	0.28	0.12
新 Scenes of City (上海)	0.59	0.40	0.01
新今里 (コリアンタウン)	0.58	0.28	0.15
新 Facets of Life (上海)	0.57	0.43	0.00
南京路 (上海)	0.56	0.35	0.09
心斎橋 (大阪)	0.56	0.30	0.14
伊勢佐木町 (コリアンタウン)	0.54	0.35	0.11
新大久保 (コリアンタウン)	0.44	0.34	0.22
ウブサラ (スウェーデン)	0.43	0.34	0.23
表参道 (東京)	0.35	0.37	0.28
新天地 (上海)	0.35	0.53	0.13
チューリッヒ (スイス)	0.32	0.32	0.35
銅羅湾 (香港)	0.31	0.46	0.23
尖沙咀 (香港)	0.19	0.46	0.36
蘭桂坊 (香港)	0.12	0.88	0.00

まず、母国語使用は、原点である。ほとんどの場合、中国では中国語を使用し、日本では日本語を使用する。次に、英語使用の増加は、国際化の象徴である。また、多様化した国際化の風潮はその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の言語の使用を盛んにしている。

各地域はまとめてみると、図2上の矢印のような使用言語変化の傾向が観察される。つまり、言語使用の趨勢は母国語の使用から出発し、一旦英語使用が増加し、上に向かい、またその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の取り入れによる共同作用で、バランスが取れた位置に到達するというプロセスである。図2上矢印のように、歴史事情と照合し近代から現代までの言語景観における言語使用の変遷が見られ、将来の変化の進行方向も推測できる。

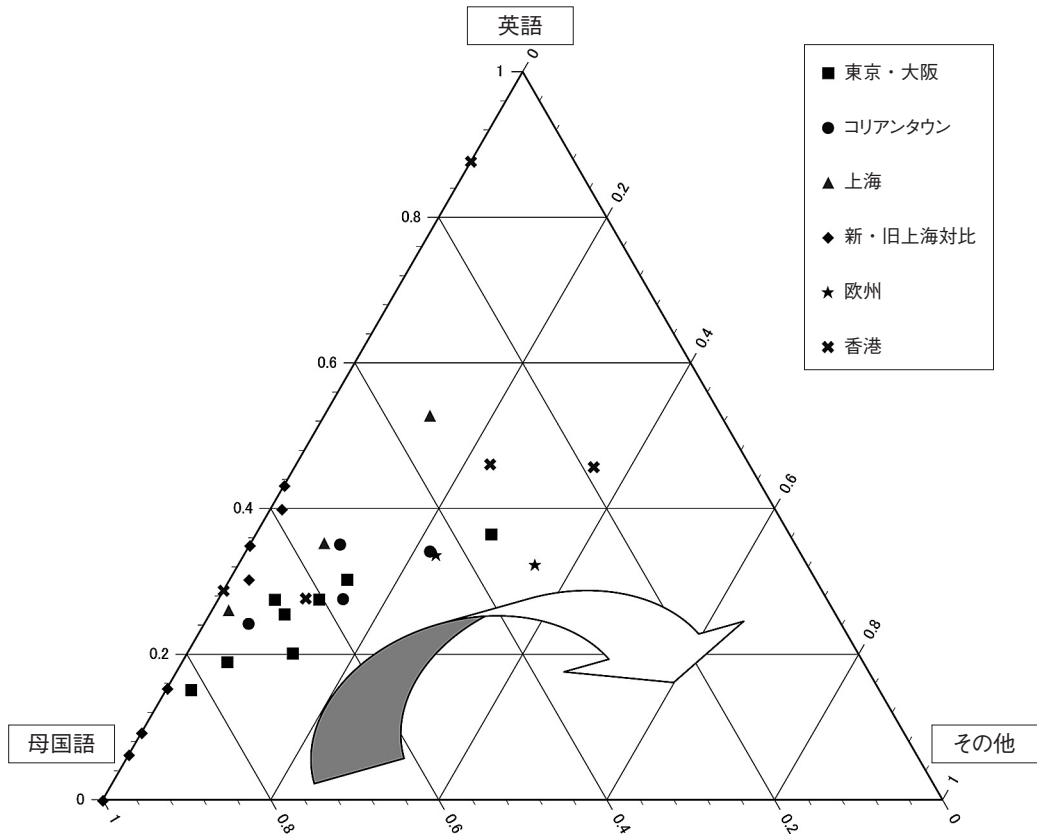


図2 言語種（母国語・英語・その他）使用割合による三角グラフ

5. コレスポンデンス分析による総合的考察

コレスポンデンス分析は多次元集計されたデータを多次元空間にマッピングして、データ要素同士の関係性を視覚的に表現する多変量解析の1つである。次元1と次元2の組み合わせは多変量解析法のコレスポンデンス分析を適用した際に、最も主要な要因の相関関係が観察される。

まず、図3のように、横方向からみると、次元1は使用言語（中国語か日本語）によって、縦軸を境に、日本が左側、中国が右側というように、左右に分かれる。

そして、図4のように、縦方向からみると、次元2はヨーロッパ諸言語及びヨーロッパ諸言語を多用するファッション関係であるかどうかを基準に、言語景観にける言語的属性と社会的属性のすべての項目が上下にプロットされる。

言語使用の視点から総合的に考察すると、上から下まで、ヨーロッパ諸言語と英語を多用するグループ、母国語の日本語・中国語また英語を満遍なく使用するグループ、母国語の日本語あるいは中国語を中心に使用するグループの3つに分類できる。この3つのグループは言語的特徴により、それぞれ言語景観の欧米志向型、折衷志向型、本国志向型（日本志向か中国志向）と名付けてみた。

に、英語のはたしきれない役割をヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語に分担してもらっていることが考えられる。例えば、フランス製、イタリア製のブランド品を扱うファッション関係の店舗はやはり英語よりもフランス語、イタリア語をそのまま使用することが多い。同様に、韓国料理の飲食店は、英語でなく、ハンゲルを店名看板に起用するだろう。この現象は英語の国際化以外に、多様化した国際化を意味する。

以上のような内的考察の結果をみても、言語景観における使用言語種の取捨において、母国語使用から英語使用への収斂、そして英語使用からヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語使用への分散という言語使用変化の現象が見られる。この現象についての解釈は三角グラフによる推測と一致する。

ただ、言語景観に見られる言語変化が言語そのものの変化でない点については、日本語方言の共通語化等のような言語変化の現象と区別すべきである。

6. 新たな定義

江 (2009a) でも指摘したように、在来の定義には様々な問題点がある。本稿では、社会的属性項目(地域、業種)がいかに言語景観にける言語的属性項目(言語種、文字種、表記法)の使用に影響を及ぼすかの法則性がわかったことから、言語景観とは景観における言語の社会的属性を包括的に表現したものと新たに定義できる。すなわち、言語と社会が景観によって介されているという構図である。この3者は図6のような関係にあると思われる。

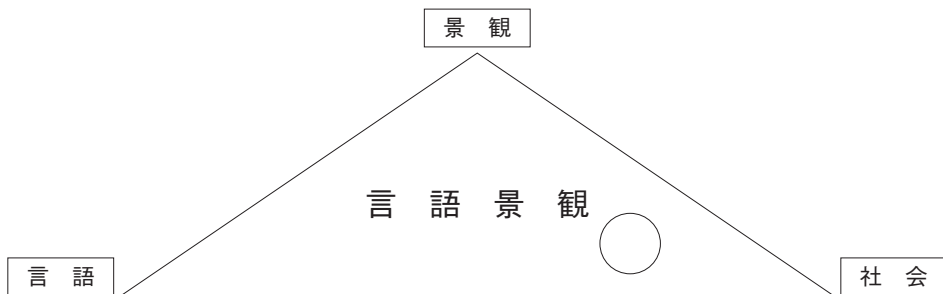


図6 言語、景観、社会の関係

言語景観に関する社会言語学的研究の領域は研究対象を言語そのものに近づける側面から、反対に研究対象を社会に近づける側面までの広がりとして捉える立場を取りたい。本稿は図6の中で位置づけてみると、丸印のところにあると考える。1.3で紹介した先行研究もこの図6の中で位置づけることができると考えてよい。

7. おわりに

本稿では、言語景観の実態を把握した上で、言語景観のパターンを本国志向型、折衷志向型、欧米志向型に分類し、共通性を示した。さらに、社会経済的要因がいかに言語景観の形成に影響しているかを解明し、法則性を見出した点では、意義のある研究である。今後、言語景観の研究を考える上で、こうした社会経済的属性を重要な要因として考慮しなければならないことを明らかにしたものだと考えている。また、考察の結果を踏まえて、言語景観とは景観における言語の社会的属性を包括的に表現したものだとして新たに定義づけている。そして、研究方法論、言語景観における言語使用に見られる言語変化の現象、より普遍的な言語景観研究の理論的枠組みについて、改めて総括し、言語景観研究を理論的に位置づけた。

最後に、今後の課題として、本研究の成果を生かした言語景観研究の理論的枠組みの構築を完成させたい。また、言語景観の資料をさらに充実させ、本研究の資料とあわせることによって、世界の言語景観を対象としたコレスポネンス分析を行い、地域性、業種による経済性以外に、言語景観の形成に影響をもたらす要因を抽出し、より広い視野に立って、言語景観研究の国際比較を行っていく必要性を感じている。

謝 辞

本稿は、山下暁美教授科学研究費報告会（2010年9月26日、神戸）で、口頭発表した内容に一部加筆・修正したものである。また、新たなデータの取り扱い方や分析の視点について、指導教授の井上史雄先生には、貴重なご教示を賜りました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

参考文献

- 井上史雄（2007）「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.255-256
- JIANG, Yuan (2010) Comparative researches about linguistic landscape of China and Japan. Sociolinguistics Symposium 18
- 江源（2008a）「言語景観から見る日本の多言語化状況」明海大学大学院 応用言語学研究科修士学位論文
- （2008b）「言語景観に見られる東京多言語化の実態—商業集積地域を調査対象に—」『社会言語科学会 第22回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.86-89
- （2008c）「日本の多言語化状況に関する一考察—言語景観を調査対象に—」第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム ポスター発表
- （2009a）「言語景観研究の現状について」『明海日本語 第14号』明海大学日本語学会
- （2009b）「日本の多言語化状況に関する一考察—言語景観を調査対象に—」『アジア・オセアニア地域における多文化共生社会と日本語教育・日本研究（第8回 国際日本語教育・日本研究シンポジウム会議録）』向日葵出版社 中国・香港
- （2009c）「言語景観の成因に関する社会言語学的考察」『日本研究文集9』徐志強（主編）華東理工大学出版社 中国・上海